

時の過ぎ行くままに (2)



なにもそのままで——ガキじゃあるまいし

桐野 三郎

※ ぼくらはお化けにはなれない

身内の法要のために出かけた西本願寺（鹿児島市）でのお坊さんの講話が出だしから面白かった。

電車を待つ駅のホームで、後方でおしゃべりに夢中な熟年女性数人の会話がイヤでも耳にはいつてくる。久しぶりの同窓会の帰りでもあったのか「いつまでも若く」とか「いつまでもお元気で——」なんて言葉を繰り返して言い合っている。たまりかねたそのお坊さんの口を突いて出て来た呟きが「あんたたちは

お化けかよ！」だったと。

人間なら誰だっていつかは老いぼれもするし死期も訪れる。それを「いつまでも若く」とか「いつまでも元気で」とは虫の良すぎる話、そんなやつがいるとしたら「お化け」ではないよ——というわけだ。

世はいよいよ高齢化社会。そのせいかいわるる生病死の生、病だけではなく「老」や「死」に関する情報がやたらと氾濫するようになった。若返りの秘訣から理想的な死に方、はては死んだ後の葬儀のあり方まで。いやはや、人間この世にオサラバするだけのために、はそこまで考えなければならぬのだろうか、昭和ひとけた生まれのぼくなど何か急ぎ立てられているようでだんだん不愉快になってくる。アンチエイジングだのエンディングノートだのしたり顔の横文字が目につきはじめたと思っていたら、ついに「エンディング

「グノートの書き方」という指南書まで現れたらしい。情報化社会もついにそこまで来たかと呆れるが、もちろんぼくはそこまで教示はいただくつもりはない。ぼくの頭の中にはいまでも昔の爺さんたちの口ぐせがしっかりとインプットされている。

「うんにや心配することなど何もなか。ただこの世で死に損なつた人間なんど一人も居りやせんのだから」

そうそう、ぼくらは所詮お化けにはなれないのだ。

※ 鹿鳴山の墓標



三年前、加治木町の鹿鳴山転法輪寺の境内に桜の木を一本植えさせていただいた。転法輪寺は開山してまだ五年。そのころは広大な敷地に空き地がいくらでも残っていた。

「桜の木を一本植えさせてくださいよ」というぼくの申し出に「はいはい、お好きな所にどうぞ」というご住職・松元優樹和尚の快諾を得て、ぼくが選んだのは境内の中で一番見晴らしのいい小高い場所、植えたのは樹高三メートル七十センチ、幹の直径はわずか五センチぐらいのソメイヨシノの幼木だが、それでも樹齢七年ということだった。その春の甲突川べりの木市で一万八千円、軽トラックで運んできての植え付け手数料二千円を入れて計二万円である。だが、というこの桜も、実は家内の友人とも子さんのプレゼントだったから実際の出費はゼロだった。

とも子さんは三年前の春九十二歳の母上の最期を三船病院で看取つたのだが、長期間世話になつたお礼として病院に桜の木を贈ることにし、それを見立てるためにぼくの家内を木市に誘つたという次第。家内も母上ご存命

中に見舞に出かけたりして三船病院の様子を多少なりとも心得ていたせいもある。その二人が木市にでかけたのだ。

「実はうちの主人も墓不要論者で墓の代わりに桜の木を一本植えるだけでいい——なんて言っているのよ」と、つい家内が口を滑らせてしまったらしい。当然のことのように「それなら今日、その桜も一緒に選びましょうよ、私にプレゼントさせて」という流れになつてしまつたのだという。そうなのだ。松元和尚には特に断りはしてないが、ぼくには最初からあの桜は自分の墓標のつもりで植えさせてもらったのである。「自分の墓をどうするか」という厄介な懸案事項が思いも寄らぬ自然な流れで解決されてゆく、そんな満足感を密かに味わいながら――。

転法輪寺の頭には「鹿鳴山」という呼称がついているがこれは誇張ではなく、裏山から

はたまに鹿が顔をのぞかせ、ときには鳴き声が聞こえたりするから付けられた名だという。高速道路からは田んぼを隔てて直線距離にすればわずか二百メートルしか離れていないのに、裏山はやがて県民の森公園に向かつて連なつていくという閑静な佇まいが魅力だ。その敷地の最高のポイントに植えた桜。通年では樹齢も十年だけに幹周りもがっしりと逞しくなつてきた。この春咲いてくれた花はまだまだ申し分程度で絢爛たる風情には程遠かつたが、植木屋の説明では桜は二十年も経てば結構な大木に成長すると云うことだつた。ということとはあと十年、あわよくばぼくは生きていくうちに己の墓標となる桜の咲き誇るさまを眺めることができるのではないのだろうか。フフフ、あの高速道を走るたびに見える、緑豊かな加治木の山々をバックに転法輪寺の境内にぱつと明るく咲いているぼくの墓

標、ちよつとした（絵になる風景）ではないか。ぼくはもう、そう言いたい気分になってきている。

※ 透明な水の底の骨たち

桐野家の墓は唐湊（鹿児島市）にある。錦江湾を見おろす高台の眺望にひかれて六十年前に父が川辺町から移設して建て替えた墓だ。納骨堂は地下式で、納骨する場合など漆喰で塗り固められた墓前の大きな台石をずらして窮屈な階段を降りるのだが、いま中の棚には七個の骨壺が並んでいる。川辺から持つて来た骨をまとめた大きな壺のほかは、父母と兄たち、それに早逝した妹の分などである。

墓の中は湿気が多い。湿気は水滴となつて白い骨壺の中に溜まる。だから骨たちは骨壺の中の透明な水の底にひんやりと沈んでいる。もちろん納骨が行われる度に全ての骨壺の水

は丁寧に除去するのだが、次の納骨のころには間違いなくまた冷たい水の底。何度もあの納骨堂に入ったことのあるぼくは水の底に眠り続ける骨を見るたびに、懐かしさのあとに一抔の（侘しき）とでもいうような後味を味わうものだった。ぼくが「散骨派」になつたのはそのせいである。

しかしこれも、わが家の墓の維持管理はもうすべて死んだ長兄の家系に委ねてあるという、三男坊の気楽さから言えることだろうが。

※ 主観と客観は別物

「戒名不要、葬式無用」と言い遺して逝つたのはたしか白州次郎、「マツカーサーを叱りとばした男」などと呼ばれただけにカッコいい。



という彼を気取るつもりは毛頭ないが、ぼくも正直にいえば葬式だの墓だのの事を真剣に考えたことはまだ一度もない。後期高齢者などとひと括りにされるようになったところから、「私たちのお墓はどうするつもり？」なんて言葉をわが家でも聞くようになり、「面倒くささもあつて「桜を一本植えるだけでいいさ」とこたえていたのだが、何回かそう言っているうちに自分でもそれでたくさんだ」と考えるようになったというだけの話。そもそも、人間が自分自身に責任を持たなければならぬのは死の瞬間までではないのか？ 死んだ人間の始末をどうするかは遺された者たちの役割のほうで、それを次から次に繰り返してきたのが人類の歴史だろう。もちろんぼくの墓だって、たとえばぼくの倅たちがどうしても豪勢なやつを建てたいというなら大いに結構、勝手にそうしてくれればいい。もち

ろん、彼らにそんな甲斐性があればの話だ。

いまぼくの頭の中は「残された人生をどう生き切るか」を考えるだけで忙しく、死後のことを考える余裕などまったくない。いや「ない」というより「もつたない」といったほうがいいだろう。大げさに聞こえるかもしれないが、ぼくがもう永いこと「俺たちにまさかこんなすばらしい人生が残されていようとは夢にも思わなかった」という実感を持ち続けて生きてきたことも事実なら、いまからさらに人生の佳境に入りつつあると本気で思っていることも嘘ではない。もちろん順境に恵まれ続けたなんて意味とはまったく違う。挫折や失敗ばかりかクモ膜下出血とか大腸ガンなどという大病も人並みに経験してきている。身内はもちろん友人知己から見たらむしろアップアップでなんとか生き延びてきたただの老人でしかないだろう。だが、そこは俗にい

う主観と客観の違い、天と地ほどの差があるのだ。当人にとつてはそのアップアップさえも通り過ぎてしまえば貴重な人生の彩（いろいろ）のように思えてくるのである。

そうそう、この号の冒頭で昭和ひとけた生まれと書いたからすでに気づかれた方も多いだろうが、ぼくたちは二十歳そこそこで敵陣に突つこんで戦死しなければならぬであろう運命を、いちどは覚悟しなければならぬかつた世代。それを間一髪、突然の終戦で救われたばかりか以来六十七年もの平和な時代を生きてこられたのだ。それだけでも奇跡的な幸運に恵まれたといつてもいい。TVドラマの言葉を借りるなら「生きちよるだけで丸儲け」、人生が楽しくないはずはないだろう。その上、いまこの紙面を借りてたわいのない墓碑の自慢話など書いているのだ。ぼくらよりほんの数年前に生まれたばかりにあたら若い

命を戦場に散らさなければならなかった先輩たちを思えば、われながらなんとゼイタクないま（現在）を生きていることかーと、いまさらのように思えてくるのである。

※ トンネルを抜け出した夏

白いチョークで黒板に人生（という文字）を書くとしたら、黒板の地色が深くて濃いほどチョークの白はくつきりと鮮やかに浮かび上がって来るのではないだろうか。



ぼくが生まれた年（昭和六年）に満州事変が始まり、小学校に入る前年に日中戦争、小4で太平洋戦争に突入、中2で終戦一である。小学生時代はご多聞にもれずぼくも純粹培養された軍国少年だったが、中学校に入つてからは軍事教練に明け暮れながらも日々濃くなつていく日本の敗色を知るにつれ、自分の

死を考えるような懷疑派になっていた。さらに昭和二十年の春から終戦までは繰り返される米軍の爆撃で鹿児島市のほとんどが焦土と化し、本土決戦も間近という悲壮な空気さえ流れはじめた。その緊迫した空気の中で、ぼくは夜な夜な思春期の真つただ中に死んでゆかなければならない自分の運命を考え続けていた。誇張ではない。ぼくが自分の生や死について、最も真剣に考え続けたのは十三歳のあの夏だ。しかし、本土決戦の結末は「一億総玉砕」しかないと思ひこまされていた。ぼくらにとつてはまさに晴天の霹靂、戦争はあつてなく思いも寄らぬ無条件降伏で幕を閉じた。終戦の玉音放送を聞いた八月十五日の正午には大人たちのざわめきの中で、ぼくらにはまだ状況が掴めなかった。「でも、ひよつとするとこれで俺たちは死なずに済むのではないだろうか」という口にするにははばから

れる嬉しさが、じわじわと心の底から湧き出してきはじめてのは何時間か経つてからだつた。あの日の午後、徐々に昂つていった胸の鼓動はいまだでもはつきりと思ひ出すことができる。目に入るものすべてが、生き生きと輝きを取り戻してくるようだった。

鹿児島に進駐してきた千名の米占領軍が宿舍として選んだのがぼくらの中学校だった。学校を追い出されて伊敷にあった陸軍の兵営跡にぼくらの移転が完了するまでの間、十月中旬から十一月にかけてだったと思うが二十日間ぐらい、学校は米兵たちとぼくらの共用という時期があつた。聞くと思つては大違い、現れる前の噂では最も残忍な海兵隊らしいという触れ込みだったのに、目の前に現れたのは明るく陽気なただの若きヤンキーたち、またたく間に生徒たちと打ち解けていった。彼らが上半身裸になつて汗をかきかきまっ

先に始めた作業といえは校庭に延々と一直線に長い穴を掘ることだったが、それが何のためか、穴であるかを知ったとき生徒たちの驚きは大きかった。ほんの一兩日後その穴の上に建ったのはなんと一列に並んだ彼らのトイレ、いや、トイレといつても腰掛けと天井がある以外には腰の部分をおろすか一メートル位の幅で囲ってあるだけ、あとは金網張りという透け透けの簡易型だ。屋上からのぞけば遠目ながら彼らの大便スタイルは丸見えだった。彼らは和式のトイレが使えないのだということを知った新鮮な驚きもあつて、生徒たちは移転作業の合間を縫ってはわれ先に屋上に上り、彼らの白い尻が見えたといつては笑いこぼれた。あの秋、ぼくたちは長い長いトンネルをやつと抜け出したとでもいうような、底抜きの明るさの中にいた。

※ ハバロフスクの秋

太平洋戦争で失われた犠牲者の数はおよそ三百万人、北はシベリアから南の島々に至るまで、まだ遺骨も収集されなのまま放置されている英霊も数知れないという。

ロシアはハバロフスク市郊外の日本人墓地で挙行された二十年前の「日・ロ戦没者慰霊の夕べ」にぼくが参加したのは、最福寺（鹿児島市）の池口恵観法主ご一行にお供させていただいでだった。十月のハバロフスクは肌寒く白樺林に囲まれた日本人墓地は黄葉に包まれていた。ロシア正教大司教以下も参加されての荘厳な式典や、林中に響きわたる読経の中に高々と燃え上った池口大阿闍梨の焚かれる護摩供養の火柱も忘れ難い記憶だが、ぼくの網膜の底にはいまひとつの光景がくつきりと焼きついている。



長い式典が終つて、日・ロの数百人はいたであろう参列者がほとんど引き揚げたあとを後尾にいたぼくが振り返ったとき、墓石のひとつをかき抱いて人目もはばからず慟哭を続ける老婦人の姿があつたのだ。墓といつても誰のものとも分らない黒々とした四角の扁平な石が点々と埋めこめれているだけである。だが、誰のものとも知れない墓石をかき抱かずにはいられない積年の思いが彼女にはあつたのだらう。ぼくもこみあげてくるものを怵えるために思わず上を見上げたのだが、彼女の鳴き声が悲しい笛のように響きわたる日本人墓地の上に、白樺ははらはらと黄葉を降らせ続けていた。

※ アムール川に流れていた詩吟

慰霊祭の翌日はアムール川の遊覧船を楽しむ組に入れてもらった。遊覧船といつても口



シア側に沿つてあの大河を何時間か上り下りするだけで、広大な中州は見えても対岸の中国側が見えるような航程ではない。真冬には一〇トントラックも渡れるような氷が張りつめるというアムール川も、十月の表情は穏やかだった。

それでも甲板に上つて川風に吹かれながら広漠たる風景を眺めていると、やはりこの風景の中で痛恨の最後を迎えなければならなかつた先人たちの無念に思いは至る。その屍はまだ幾柱もこの川底に眠り続けているのだろうか―などと。

その船尾から、詩吟の声がかすかに聞こえてくるのにぼくが気付いたのは、クルーズも終わりに近づいてからだつた。とんとんとんとんというエンジン音に混じつて流れるその声は、最初はスピーカーから流れる船内放送かと思つたが、音に近づいてみて船尾にひと

り立つ人影に気づいた。冷気を避けてほとんどの客はもう船内に入り、誰もいない船尾から川面に向かって詩を吟じている姿は、コートを羽織った婦人だがどこか端然としていて近寄り難い。ぼくは邪魔にならないように少し離れた柱の影で聴き入った。

さんせんそうもくたごうりよう
じゅうりかぜなまぐ

山川草木轉荒涼 十里風腥さし

しんせんじよう
新戦場・・・

ぼくも小学生時代に学舎に通ったことがあるだけに詩吟は懐しい。それにしても絶えて久しく吟じたことのない詩を、まさか半世紀後のアムール川の船上で聴こうとは。

「すばらしい詩吟を拝聴させていただきました」とその婦人にぼくが挨拶したのは、夕方ホテルのロビーで姿を見かけたときだ。香川県から参加したという彼女に詩吟を教え

たくれたのは、シベリアに抑留されたまま遂に帰還することのなかった父上だという。故郷を出発するときから、アムール川で詩を吟じようと心に決めてきたらしい。

「今日は五吟いたしました。でも聴いてくださる方がいらしたとは嬉しい。長年の心のしこりが取れたような気が致します」と、晴れやかな笑顔を見せていた。



※ 思川の水鳥たち

始良市に住むぼくは夜明けに思川流域を歩くのが日課だ。その途上では「地球というこのホシ(惑星)に生まれた俺たちはなんと幸せなことか」と思うような美しい光景に出くわすことがよくある。そしてその度に「年甲斐もなく子供じみた感情をまたー」なんて苦笑したりもしているのだが。

でも人は皆、同じ風景や光景を見ていても心の網膜に投影している美醜は月とスッポンほどの相違があつたりするのではないだろうか。カメラで写す写真だつてアングルや印画紙が違えばまったく異なる画面になるように――だ。その点、ぼくらは（すくなくともぼくは）あの十二歳の夏以降、「生きていることすばらしさを実感しながら生きてこられた」という意味で、誰よりも美しい風景を見ているのかも知れない。ふと、そんな自己陶醉に浸りながら歩いている自分に気付くことさえあるのだ。「比べるべき不幸な時代を知っている幸せな世代」とでもいうべきだろうか。でもぼくたちがそうなら、いまの時代には「幸せな時代に気付かない不幸な世代」と呼ばれてもしかたのない若者が多いのかもしれない。

思川で遊ぶ水鳥は多い。この地に住みつい

ている鳥の種類も多いが、ことに河口から海辺にかけては季節によつて北から南から、国境などという愚かな人為の境界など造作もなく超えて飛来する水鳥たちが無心に群れ遊ぶ。当然のことのようにぼくの脳裏にはアムール川や日本人墓地の光景が蘇える。そこでまた、ぼくの目に映る光景は愛しさを増していくのである。



※ ぼくのエンディングノート

あの戦争が終わつて六十七年。こんなにも続く平和を満喫しながら生きてこられたのだ。そんな自覚が背景にあるからだろうが昏迷を続ける日本政治の現状なども、誤解を恐れずぼくらに言わせてもらえばまだまだ「コップの中の嵐」。それだけに同世代の残党が集まる酒席では口角泡を飛ばしてのいわゆる天下国

家論になりやすいのは相変わらずながら、ケ
ンカ腰になるよりはむしろ「楽しむ」という
傾向が強くなってきた。

始良市に移り住んで九年になる。天文館で
飲んでも終電は深夜までであるという足の便も
だが、すぐ目の前を流れる溪流に螢が舞うと
いう自然いっぱい環境が有り難い。しかし
さらに嬉しいハプニングが訪れたのが五年前
の転法輪寺の開山だった。和尚の松元優樹先
生は最福寺の池口恵観法主の高弟として長年
同寺で修業を積まれた知る人ぞ知る阿闍梨。
ハバロフスクはもちろんその後、池口法主が
ローマ法王ヨハネパウロ二世に謁見されたと
きもバチカン宮殿にまで引率いただくなど
も数年にわたる深いご縁をいただいていた。
年齢はぼくの息子といってもいいぐらいだが、
何かにつけて気楽に相談に乗っていただけ
得難き師である。その先生がまた同じ市内の

加治木町に開山されたばかりか、その境内に
桜まで植えさせていただいていた。ぼくは・・・

さて、ところでぼくは長々と何を書こうと
しているのか。そうそう、一言でいえば「エ
ンディングノートの書き方」という平和ボケ
したような表題の語感にひっかかり、ちよつ
といちやもんをつけてみたくなったというの
が正直だろう。

もちろんこの本を読んでもみないで言うの
もおかしいが、きつと時宜を得た有用な本だ
ろうしそれを読む人とやかく言うつもりも
まったくない。だが、「エンディングノート」
という言葉聞いてぼくはまっ先に思い浮か
べるのはやはりあの戦争で、死地に赴く前夜
に特攻兵たちが書き残していったたつた数行
の遺書(というエンディングノート)なのだ。
悲壮な彼らの胸中を思えばぼくたちのように
「なにそこまで」教わらなくとも、いやもつ

と率直に言えば「ガキじゃあるまいし」とま
で皮肉りたくなる、そんな世代もあるのだ―
ということぐらいは言っておきたかったとい
うわけである。

実をいうとぼくには古くから、子供たちと
固い約束を交わしていることが一つある。彼
らの子供たち（つまりぼくの孫たち）が思春
期に入るころには必ず一度は知覧の特攻記念
館を見学させること―をだ。狙いはもちろん
孫たちに「いま（現在）ある幸わせに気付か
ない愚か者」にだけはなつて欲しくないから
である。そしてその約束だけでぼくはもうエ
ンディングノートなるもの的大半は書き終わ
ったつもりでいるのだ。もちろん最後に書く
べき一、二行はまだ残っているのだろうが、
それを考えるにはぼくはまだ若すぎるだろう。

（エッセイスト）



左奥から流れるウスリー川と中央奥から流れるアムール川が合流する地点
(Wikipedia より)